

## 東熊会会員による「里帰り講話」概要

日 時 平成29年6月19日(月)10:30~11:30  
場 所 玉名市立睦合小学校  
対 象 同校児童、教職員等  
講 師 株式会社ヒート・ビート プリンシパル 池田 輝久 氏  
参加者 74人(児童63人、教職員等11人)  
テーマ 大人社会で求められること~夢・挑戦から

### 【講話概要】

将来、社会で「活躍できる人は?」、明るい子、元気な子、やさしい子である。明るい子は顔がにこやか、ほがらか、そして、あいさつができる。あいさつは自分から先にするものであり、後からあいさつするのは返事と同じである。私は、「人間」「ひと」に関心がある。「ひと」は奇跡の産物である。



脳の細胞は同じだけある。大切なのは、いかに使うかである。3人の感想文を例示しながら

「3人の感想文を見てどう思いますか。」と問いかけ、計画性がある感想文とそうでない感想文があることを指摘された。計画性の差は小学校から出てくるものである。10行あれば、計画的に構成し、10行しっかり書くこと、オーバーするようであれば、調整する習慣を身につけるべきである。

クリアホルダーの画像を示しながら、「なぜ私は牛の画像のクリアホルダーを買ったと思いますか。」と問いかけ、児童との応答のキャッチボールを通じて、「学生時代は試験の答えは一つでいいが、大人の社会では答えは一つではなく「N」個、つまりいくつもある。」、学生時代の成績がいいというのだけでは、社会で活躍できるわけではない。

「レギュラーもすばらしい。」「レギュラーになれない子もすばらしい。」のように両方のことをよくわかる人は社会で活躍できる。文字・言語を認識する左脳、イメージ、映像を認識する右脳、この両面性を高めることが大切である。

なぜ、みんな手をあげないのか、手を挙げて発表することは恥ずかしいことではないのだ。アメリカでは手をあげるのが当たり前、手をあげないことの方が恥ずかしいこと。しかし、日本ではなかなか手をあげない、手をあげることは恥ずかしいことになっていないか。

その違いは、先祖に起因し、ルーツが狩猟民族であったアメリカは矢を射なければ獲物を得ることができないから、当たらなかったことではなく撃たなかったことを責められる。だからシュート(手をあげる)する。ルーツが農耕民族である日本は長い期間をかけて稲を育てるから、失敗しない最良の方法は人と違うことをしないこと、難しいことに挑戦しない。つまりシュートしないという違いがある。失敗を恐れずシュートしてほしい。